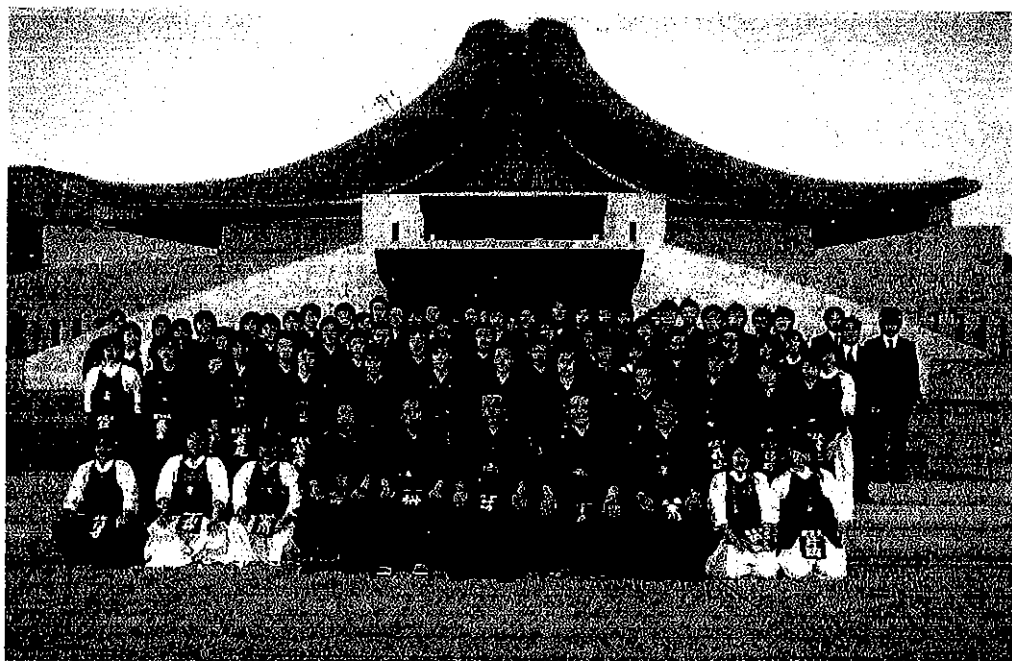


平成15年度  
中四国学生剣道  
リーダーゼミナール  
中四国を担うリーダーを目指し  
学び取ろう武蔵の里で



日時：平成16年3月9日（火）～12日（木）  
場所：宮本武蔵顕彰武蔵武道館  
主催：中四国学生剣道連盟  
主管：鳥取大学

# 平成15年度 リーダーゼミナール日程

9日(火)

12:30 ~ 受付  
13:00 ~ 開会  
14:00 ~ 実技指導1・稽古  
17:00 ~ 入浴  
18:30 ~ 夕食  
19:30 ~ 講話

10日(水)

9:00 ~ 実技指導2・稽古  
12:00 ~ 昼食  
14:00 ~ 審判法・実技指導  
17:00 ~ 入浴  
19:00 ~ 交流会

11日(木)

9:00 ~ 試合  
12:00 ~ 昼食・感想文提出  
13:00 ~ 閉会・解散



## 講話

今回のリーダーゼミナールでは、講師として、全日本学生剣道優勝大会において、大阪体育大学を優勝に導いた大阪体育大学助教授の神崎浩先生をお招きして、講話が行われました。

### 『全日本学生剣道優勝大会に優勝して』

大阪体育大学助教授 神崎浩

#### はじめに

今日は、「全日本学生剣道優勝大会に優勝して」ということで、大阪体育大学が全日本学生剣道優勝大会に優勝するまでのプロセスについて話したいと思っています。中四国の代表が参加しているわけですが、それぞれの大学の目標を目指して練習していると思います。大切なのは、優勝ではなく「歓喜」です。歓喜は、意味のある相互作用です。なぜ歓喜かというと、皆さんがそれぞれのレベルで練習しています。もちろん、全国大会を狙うぞとがんばっている人もいるだろうし、大学から始めて、次は初段を取るんだという人もいるかもしれません。一度も勝ったことがない大学も、「今回は一回でも勝つぞ。」これも歓喜だと思っています。それから、言葉を換えれば、達成感という言葉に言い換えられるかもしれません。例えば、「今年は部員が5人しかいない。けど、この5人でがんばるぞ。」という目標を立てて、その充実したものであると思います。それから、「剣道を通して人の心を感じる。」これもまた歓喜なんですね。「よかった。私は剣道をやめなくてよかった。剣道をやってよかった。」これも剣道をやっていく上での素晴らしい一つの歓喜なんです。こういう全国の大会を優勝するという含めて、ベスト4に入るとか、中四国で優勝するとかもふまえての心を感じる、剣道をして感じる、そして得た歓喜は意味のある相互作用であるというわけです。

つまり、自分一人ではなく、人間が何人が集まって一つのことを取り組んでやっていく、もちろんOBも先生方も近くの人たちも大学のいろんな仲間も、それら全部含めての相互作用なんです。その相互作用を、私の昨年の大会で優勝したことの話の中で感じ取ってほしいと思います。

もう一つ、ストーリー、物語を作らなければいけません。これは、何でもそうです。人間が生きていくことは、こういうストーリーがあるわけです。このストーリーを話しながら、なぜ昨年、大阪体育大

学が優勝したのかなということを考えてもらいたいと思います。

#### 道のり

まず、道のりです。37年と18年。37年、これは何かというと、大阪体育大学ができたのは、昭和40年。この年は、東京オリンピックの翌年です。剣道部ができたのが、創設の翌年ですから、昨年で37年になるわけです。これまでにこういう戦歴があるのかというと、優勝2回、準優勝4回、3位4回、こういう結果なんです。日ごろ剣道ばかりやってきた先輩たちは、「優勝するぞ、優勝するぞ。」といつも言っていますが、こういう結果です。18年、これは、私が赴任してからこの三月で18年になります。その間の成績は、優勝1回、準優勝3回、3位3回です。最初に大阪体育大学が優勝したときは、私が筑波大学の選手で大阪体育大学と決勝で戦って、筑波大学が負けて大阪体育大学が優勝しました。私は、決勝で私の郷里の同級生とあたって、先に一本取ったけれど取り返されて引き分けて、大将戦に持ち込まれました。私が勝っておけば、優勝でした。このときの大阪体育大学の大将が、私の一つ後輩の石田利也だった。筑波大学の大将は、山中洋介で、決勝前に俺は石田には勝てないから大将戦に回すなと言われました。このときに、うちは負けたなと思いました。その年に大阪体育大学が優勝して、私は、筑波大学の選手として大阪体育大学の優勝に貢献しました。

過去の全国大会では、どこの大学が勝っているのか調べてみると、やはり関東以外の大学が勝つということは、難しいということが分かりました。関東以外で優勝しているのが、大阪体育大学、近畿大学、鹿屋体育大学、そして滋賀大学です。じゃあ、ベスト4はどうかというと、先ほどの4校以外に、徳山大学、中京大学、同志社大学、龍谷大学、東北学院大学、そして福岡教育大学です。これだけなんです。今年で51回大会だけど、この51回の間に関東

の大学の多くがベスト4に入っています。それ以外の大学は、入賞することが非常に難しい傾向にあります。特に、武道館でやる年で入賞するのは難しいです。なぜかよく分からないのですが、難しいんです。徳山大学が国士舘大学を首の皮一枚のところまで追いかけていたことがあります。これは、ものすごく価値があります。中四国では、徳山大学だけだから、これはやはり大変なことなんです。



## 四年間の流れ

それでは、大阪体育大学が今年優勝するまでに、どういうことをしてきたかということをお話したいと思います。

3年前、一回戦で敗退しました。明治大学と対戦し、リードをして大将戦に持ち込みました。大将戦では、最初に一本取って勝ったと思ったが、時間間際に一本取られて、あせって取りに行ったところを取られて逆転負けでした。試合が終わって、立ち上がれませんでした。その年は、明治大学が優勝しました。

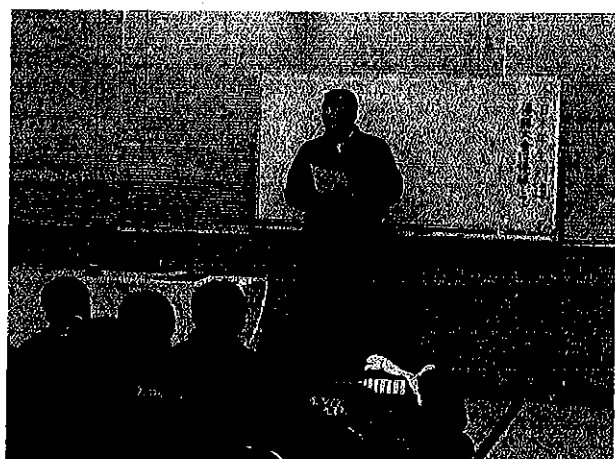
2年前、3位という結果でした。武道館で3位になったことは久しぶりででした。このときは、一人ケガをしている選手がいました。手首の腱鞘炎を起こしていました。これはよくあることですが、竹刀が握れません。ところが、この選手はエースだったこともあり、大将をさせて欲しいと言ってきました。一回戦は、4回竹刀を落として二本負けでした。試合の前日、竹刀が握れないということで、痛み止めを打ってもらっていました。しかし、当日に薬がきれてはいけなそうと思い、薬と注射器を持って行きました。そのときはまだ一回戦だから薬が効いてるみたいだから大丈夫だと言うため出場させると、竹刀を落とすばかりでした。これは使い物にならないなあと思ったが、準決勝だけ大将に出場させた。そのときは勝ちましたが、こういうケガ人が出て非常に痛手でした。この年は、筑波大学に負けて、その筑波大学が優勝しました。

1年前、このときは3位でした。このころになる

と、手をケガをした選手も治ったが、同期の選手が足をケガしました。ずっと痛がっていて、病院で見てもらうと腱が切れていました。それから手術をしてこの選手は半年間棒に振りました。大会当日になると、その選手はやれませうと言うから出場させました。しかし、何かカクンカクンしていました。「お前おかしいぞ。」と言うと、「大丈夫です。」と答えました。みんながそう言うんです。足を引きずっていたため、はずそうかなあ、どうしようかなあ、4年生だから使ったわけです。試合が終わった後に聞いてみると、もう歩けませんということになりました。この年も筑波大学が優勝して筑波大学が2連覇しました。

今年は、1回戦は早稲田大学と対戦し、代表戦になりました。数日前、早稲田の顔、安藤先生が若くして亡くなりました。私たちもそれを聞いて、さすがに学生も意気消沈だろうなと思っていました。当日、早稲田大学の学生は、喪章服で黒いリボンをつけて、この全日本はがんばるぞとものすごい意気込みでした。いかんせん、そういう話題性もあって、お前らは関係ないぞと言ったのだけれど、学生は違っていました。審判も緊張しているし、開会式後の第一試合目だったので、ものすごく独特な雰囲気でした。試合は、先鋒が一本勝ちをして、これはいけるなあと思ったら、副将まで引き分けでした。大将戦では、一本負けをし、代表戦となりました。この代表戦は、20分くらいかかってやっと勝利を勝ち取りました。それで、今回の大会ではこの大将がキーパーソンになると思いました。この選手は、大事なところでいつも負けていました。ところがこういう一つの経験をしているということと、彼の人間性が素晴らしいということで、今回の大阪体育大学の大きなポイントとなっていました。二回戦も、代表戦でした。代表戦に出た選手が、面を打ったところを胴で抜かれそうになったとき、ひざに当たりました。普通なら立ち上がって伸ばしたりさすったりするが、それができないようで、すごく心配をしました。今年から大阪体育大学剣道部に、学生トレーナーをつけていました。剣道部の部員ではありませんが、学生のトレーナーとして大学から養成していました。山口県出身の学生で、剣道のトレーナーをやりたいということで、今年の4月からずっと一緒にやってきました。過去にこういうけが人が出るという経験があったため、大事だろうと思いましたが、このときは、何とか最後まで試合をすることができたが、いつまでたっても腫れが引かないので、トレーナーを呼んですぐ処置をするように言いました。腫れが出ないようにテーピングをしっかり巻いて氷で冷やしたりしました。それがどれくらいの功

を奏したのかは分かりませんが、こういうトレーナーがいたことが非常に役に立ちました。これが4年間の流れです。



## ストーリー

今年は、最終的に優勝したわけですが、今年一年のストーリーを組み立てていきたいと思います。大阪体育大学は、12月に幹部交代があります。中四国では、3年生が幹部をするみたいです。4年生は、就職活動とかいろいろと忙しいのだろう。大阪体育大学の場合は、4年生の12月まで勤めます。

2月は、15日間の寒稽古を行います。このとき、色々な人が集まってきます。こういうところでいろんな人たちとの交流ができます。3月には、春合宿、4月からは新学期が始まります。5月は、関西大会と西日本大会があります。今年は、去年の選手が残っていたため、期待できると思っていました。しかし、学生というのは、浮き沈みが激しく、力があっても勝てないし、力がなくても優勝することもあります。そういう意味では、みんな可能性があると思います。これまで厳しく指導してきたのにぼろぼろに負けて、私は大爆発をした。8月は、夏合宿を行った。今年は、信州大学と上越大学と一緒に行いました。このとき、作道先生が学生の剣道について心配していました。どうということかという、「『はじめ』と言うとすぐ打って行って、ガチャガチャしてつばぜり合いになる。こういうのは剣道ではない。そんな剣道は認めない。立ち上がってすぐに打ってはいけない。」という指導を徹底的にしました。剣道というのは、間合いが合って、攻め合いがあってという関係があって、そういう相互作用の中にいる。いちかばちかで打っていくというのはだめだだめだという指導をされました。そうすると、学生がそうしなければいけないんだなあ、だんだん分かってきます。関西大会ではいい成績が出ると思いました。しかし、全然だめでした。学生は素直で、夏合宿で

すぐに打ってはいけないんだということを頭に入れた剣道をしていたら、相手がどんどん打ってきました。それに対して、全部受身になっていました。こいつら迷っているな、夏合宿でやったことをちょっと履き違えているなと思い、修正指導をしました。全日本まで3週間となりましたが、全然調子が上がりません。そこで、4つのことに取り組みました。

### ・ 自己管理

夏休み中は、授業がないため時間がたくさんあります。休憩になったら自分の部屋でクーラーをがんにかけ、夕食になると起きてきて夕食を食べ、飲んできてまた寝てしまう。夜遅く寝て昼寝をして稽古に出る。生活のリズムが全然まわりがない。これを機に、昼間は寝るな、何でもいから本を読み、ご飯は3食とれ、生活する中で今日の稽古はどうだったのかどうしなければいけないのかを考えると指導した。

### ・ 一人稽古

朝稽古の前に、みんなを壁の前に10分間立たせました。始めと言ってからやめがかかるまで、絶対に動くなということで、呼吸を整えて、精神統一を目的として行いました。なぜこのようなことに取り組んだのかというと、最終的には自分自身をコントロールできなければなりません。これにより、我慢するという気持ちをつくります。私が竹刀でぶったたくから我慢しろということではなく、自分自身で我慢しなければなりません。その中での10分間です。しかし、なかなか立ってられない。左肩が上がったり、右肩が上がったり、腹の力が抜けたり、かゆい所をかいたりする。あるときは、1時間やらしただけもある。一人でやらせて、その中で自分自身で耐える、我慢するという力を身につけさせようと思いました。

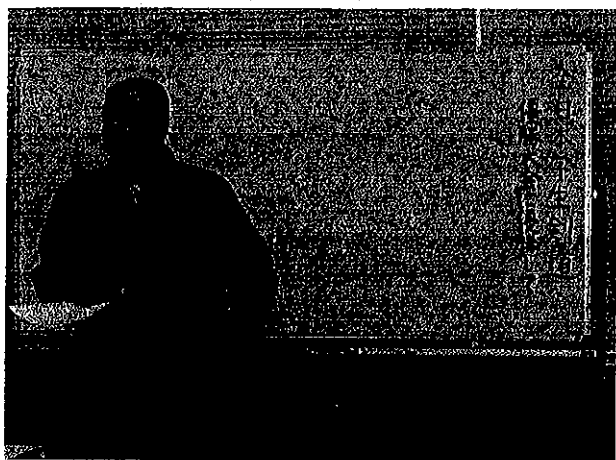
### ・ 指導稽古

関西大会では、選手が打っていったら小手を抑えられるのではないかと考えてしまい、不安になって積極性がなくなりました。それを稽古の中で厳しく指導し、俺の剣線を打ち破って来いというくらいの稽古をしました。私も一生懸命、5分だという気持ちで稽古しました。そうすることで、学生の出る勢いや掛る勢いをつけようと思いました。

### ・ 自立性の確立

例えば、学生が、「先生、こういうことがありました。どうすればいいでしょうか。」と尋ねてくるのが頻繁にあります。私は、その度に「知らん、自分らで考えろ。」とつきはなしました。普段は、何かあったら相談しなさいと言っているが、何でもかんでも頼ってくる。だから、今回は徹底的

につきはなした。稽古はちゃんとしたが、「自己管理のこと、身体が重い、チームがまとまらないなど、そういうことは学生でどうすればいいのか考えてやれ。」こういうふうにつきはなした。



この4つのことを行い、全日本を目指しました。こういうことをして、生徒の意識が変わってくることで、1,2人しか使える選手がいないなあというのが、3人になり、4人になり、5人になったと思ったら1人減ったりしました。だんだん変わってきているなあと感じました。

もう一ついえることは、「学生は、一日で変わる。」ということです。昨日は良かったのに突然変わったり、全然だめだったなあと思っていた選手が急に良くなったりします。こういう経験もあったため、学生たちの意識が変わり、学生自身が変わることができたらなあと思いました。結果的に優勝したわけですが、こういう取り組みがどれだけ優勝に影響していたのかは分かりませんが、こういう取り組みをしてきました。

## 剣道と人間性

剣道と人間性ということ、私もものすごく考えています。例えば、「先を取れ」ということがあります。先を取るということは難しいことです。しかし、裏を返せば相手を騙すことと言い換えることができるかもしれません。「面にいくぞ」とみせながら小手を打つと決まるんですよ。「自分のペースでいけ、マイペースマイペース」ということがあります。これはなにか自己中心的な感じがします。「気を抜くな」とか「我慢しろ」と打って出ない。そして、相手をイライラさせる。宮本武蔵なんかがそうですね。必ずしも人間的に受け止められるものばかりではない。しかし、試合に勝つ人は、こういうことがうまい。勝負になかなかいかず、イライラさせたり、行くと見せかけて行かないとか、小手と見せかけて面を打つとか、つばぜりあいでも分かれようと言って

別れ際を打ったりして、こういうことをしている人が、試合がうまい。

では、剣道で試合に勝つことって何でしょう。何に価値があるのか。自分がどういうふうに出るかなければならないのか。そこで大事になってくるのが、剣道理法です。これには、たくさんあります。いろんなことがあって剣道理法なんです。「こういうふうに出るんです。」「一足一刀というのはこうです。」「気・剣・体の一致とはこうです。」「すりあげ技はこうです。」「こういう理法があります。こういうことをきちんと守っていくことが、大事ではないかと思えます。剣道の理法、言い換えれば、全てが正しいかどうか分かりませんが、正しい剣道を常に心がけて毎日稽古をやっていくことが大事なのではないのでしょうか。そうすると、ここでいうフェイントをかけて面とみせかけて小手を打つという技が、相手をくずして打つということからすれば、無理やりくずさなくてもいいでしょう。相手のくずれを待ち、相手が勝手にくずれる瞬間を打つ。こういうふうになっていくのではないのでしょうか。

## リーダーとしての立場・役割

もう一つ、リーダーとしての立場・役割について話したいと思えます。まず、率先垂範です。リーダーは、自分から先に何でもやらなければならない。

次に、組織なので、リーダーが孤立してはいけません。いろんな組織で構成されています。孤立すると、チームがまとまらなくなります。次に、コミュニケーションが取れる人でなければならない。同級生、先輩後輩、OBの先輩、大学の先生、師範。そういう過程でのコミュニケーションが取れる人でなければならない。自分のことばかり考えている人はだめなのです。

最後に、先輩後輩、先生とかのクッション役にならないといけない。人と人との間に入って、リーダーは何かあったときにギクシャクしないように務めなければなりません。人間関係は難しく、なかなかうまくいきませんが、部を運営していく上で、リーダーはいろいろと考えていく必要があります。大阪体育大学では、幹部交代のときに目標を立てます。これは、非常に大事なことです。目標を達成するために、目標を決定していなければ、達成することができません。わたしは、大学でこのことを徹底的に行っています。目標を立てさせるために、年間計画を立て、大体何月に何があって何をやるかということを決めます。毎年こうだけど、私たちの代ではこうしようと取り入れるべきです。難しいことをやる必要はありません。例えば、部員が毎年

一人や二人だったらやめるからそうならないようにしようとか、もちろん大会に向けての目標もあるけど、単位を落とさないということもあると思います。剣道をする前に、大学の学生であるから、その前に社会人であるから、こういう目玉はきちんとできなければなりません。また、その取り組んだことに対しての自己評価をしなければなりません。一年間を通してでも途中経過でもいい。この目標をやってきて、もう少しこうしたらよかったとか、振り返って見るのが大事です。今年の始めにこういう目標を立てたけど、これくらいしかできなかったなあ。いやいや、目標以上のことができたよ。そういうことができれば、大学剣道部は、よくなっていくと思います。

## おわりに

一年間を通して、ストーリーを作る必要があります。しかし、残念ながら一生懸命やっても、1回戦で負けて諸行無常の時もあります。世の中は厳しいんです。これだけやってもコロッと負けるんです。だけど、目標を立てて、今年の目標はこれだ、この目標を立ててがんばるぞというふうにやっていれば、諸行無常であっても、10年経て振り返ったときのあのときは、1回戦で負けたなあ。みんなで肩組んでおいおい泣いたなあとそういうことなんです。

私は、関西のリーダーズキャンプというのに参加しています。滋賀県で二泊三日やてます。関西のリーダーズキャンプは、先輩方が非常に厳しいです。気合が入っていないと感じたら、掛り稽古をさせられる。学生の表情が、次第に引きつってくる。今日、みなさんの様子を見せていただくと、非常に和やかに行われたいです。先輩と学生が企画して、何か自分たちでやっていこう意図が見えて、非常に嬉しく思います。

関東にも関東学連がありますよね。関東の地域には、あれだけいい選手がそろってきているのに、なかなか勝てない。今年みたいに、ベスト4に1チームだけしか入れないのは前代未聞です。私たちが見に行っていないなあと思う選手はみんな関東に行ってしまう。そういう人たちが影も形も見えません。関東学連は、毎年韓国と定期戦を行っているようです。韓国の学生はスーツを着てネクタイを締めてきて、凄然と稽古をして帰っていきます。関東の学生は、春休みに来やがってと思い、指名された学生がジャージで出迎えて、試合せなあかんのかとって試合をしていました。1勝2敗で負けています。会長も言われているんですが、「学生剣道の危機だ」と言われています。自分自身が学生剣道として、誇りを持って取り組んでいかなければなりません。強い

弱いじゃない。日本人として、剣道をやっていくことの誇りをもって取り組んでいかなければ、韓国に、負けてますよ。韓国の人たちは、緊張感を持って試合をし、帰ろうと思っているのに対し、関東の学生は、誰も見送りに来ていません。懇親会をやっても、関東の学生は役員だけでした。心がないようです。試合や稽古は真剣にやっても、これじゃあだめです。先輩に言われて、先生に言われてではなく、自分たちでやっていくことが望まれているのではないのでしょうか。

これから一年間皆さんが各大学のリーダーとして、中心としてそういう気合でやってください。私は、そういう意味では、他の連盟よりか非常にいいまとめりでやっていると思います。



## 坐業（ざぎょう）

### ～全日本学生剣道大会の優勝を振り返って～

神崎 浩

#### この4年間の高い

平成12年度全日本学生剣道優勝大会は、大阪で開催、一回戦、強豪明治大学との一戦は、大将戦となり一本取れば勝ち、引き分ければ負けという展開であった。開始早々一本先取し有利な展開になるが、それでも守ることなく相手を果敢に攻めたことが結果的に仇となり、時間終了間際に一本返されそのまま逃げ切られて初戦敗退という悔しい結果となった。結局、そのまま明治大学が安定した戦い振りで優勝した。

平成13年度は、日本武道館での開催。学生大会の歴史で、関東会場（日本武道館）でそれ以外の地域の大学が入賞することはほとんどない中、本学は平成元年に3位入賞を果たした。この年もそれ以来の日本武道館での3位入賞であった。手首に激痛の走る選手を抱え、痛み止めの注射を持参しての戦いであった。結果は、筑波大学に惜敗、そして筑波大学が優勝した。来年に向けての足場ができたと感じた。

平成14年度大阪での挑戦は、昨年の主力選手を多く抱えたが、またもや怪我で足を引かず選手を起用してのものだった。大逆転の末、東海大を下し準決勝に進んだが、またもや筑波大学に苦杯をなめる。2年連続で筑波大学に敗れ、その筑波大学は2連覇した。

今年15年の大会は、ここ2年連続でベスト4に位置した流れの中で、もうそろそろ頂点に達したいという希望の年であった。しかし、日本武道館開催ということで地の利もなく、選手勧誘を通して肌で感じる各大学の強化の様子は、我々に希望がそう簡単なことではないという現実を突きつけるものがあった。期待と不安材料を同時に抱えての挑戦は、一回戦で苦戦したものの以後大差で勝ち進み、念願の全国制覇を果たすことができた。

#### 理想の追求

大学が始めて全国制覇をしたのは21年も前の話になる。今の学生が生まれて間もないかまだ生まれてないものの方が多いくらいだ。そのとき私は決勝で対戦した筑波大学の選手であった。以来、「優勝」に対する憧れは募るばかりであった。今回の優勝は狙いに行っていたこれまでの臨戦体制とは異なり、ある意味予期せぬものであった。決して試合に向けての取り組みが例年に比べて希薄であったわけではなく、締めムードがあったわけでもない。今年のチームは頂点を狙えるまでの安定感がないという私の見立てであった。今回の大会における「優勝」について監督としての勝因を分析してみたい。

春と夏に行う強化合宿でのいつもの作道師範の指導は「剣道の道筋」、つまりどのような剣道であるべきか、を浸透させるものである。今日的、流行的な戦法、いわゆる「勝てばよし」とする内容では、剣道を通して何を学ぶという意味や特に体育系大学の使命として大きな問題を抱えることになる。ましてや最初から光り輝く玉石を獲得できない状況下では、基礎をしっかりと作って、鍛えて練するしかない。やや遠回りのように感じるこの指導が、本学の剣道を支え得ていることは確かである。その具体的な剣道の内容とは、相手と対峙した場面において、攻撃、防御を兼ね備えた構えを取り、相手を攻め立ててから機会を捕らえて打突するというものである。構え合って即時の衝動的な打突は「怖いから先に手を出す」「我慢する力がない」「注意力がない」といったことに他ならない。剣道は技を出す前の相手とのやり取りが大切で、そこに両者の技を発する必然的な関係から生まれ、技の妙味、つまり少しずつであるが学生の剣道に変化が現れ、成果がうかがわれるようになったが、ある時期と角転換期にきた。それは学生が解かりかけてきただけに、理想を求めようとする取り組みが現実との狭間で狭間で却って中途半端になってしまった。関西大会での選手の不調は、そうしたものの表れといえよう。試合開始早々に相手から先に攻められ、本学の選手は受身に回り、打たれないよう後ずさりしている内容が随所に見られた。決勝戦まではたどり着けたものの近畿大学に完敗であった。

#### 優勝への取り組み

関西大会の内容では、到底全日本では戦えないという反省をもとに、次のような点を重点的に指導することになった。一つ目は、具体的な課題に向けての毎日の稽古に集中するための「生活場面の見直し」。二つ目は、相手を前にして自分をコントロールできない状況を打破するために「立ち稽古」という一人で行う



稽古法の導入。三つ目は、相手に向かった時の恐怖心を払拭し、果敢に立ち向かうスタイルを確立するために、我々指導者が連日選手と直接相手をしてその点を促す「指導稽古」の徹底。四つ目は、最終的には他人に促されて行動するのではなく、自らという姿勢で剣道に対してや、相手に対して取り組むという「自主性の確立」。

関西大会が終わって全日本まで3週間しかないにもかかわらず、これらの取り組みの成果も上がらない日が試合直前まで続いた。選手も回りもこのままではどこの大学とやっても負ける可能性があるとする危機感が募るばかりである。そのような状況が変わりかけたのは、調整合宿に入った試合3日前のことであった。打突に躊躇がなく、技の切れが出てきた。決まり技が各人の得意とするところになってきた。選手ばかりでなく4回生がチームをそして部員を引っ張っている。やっと勝利への手応えを感じ、私の残された使命は、このチームを当日どのような選手の配置にして個々の良さを引き出すかにかかっている、という気持ちで上京した。

一回戦は、開会式直後の第一試合、相手は積極的な強化を図り始めた早稲田大学である。大会数日前、すでに退職していた早稲田の顔として君臨していた指導者が急逝するという中で大会出場であった。マスコミも含め会場全体が表彰をつけて優勝を狙う早稲田大学に注目していた。試合は、先鋒が一本勝ちをしてスタートしたが、その後全て引き分けて大将戦となり、それを守りきれず一本負けして代表戦にもつれ込んだ。代表戦も延長となり、20分を超える死闘の末、ようやく旗がこちらに上がった。大きな山場を越せた。見方が違えば負けていたのかもしれない。不甲斐ない試合をして悔しいのか、安堵感か、既に泣いている選手もいた。「ばかやろー！泣いている場合か！一度死んだと思ってこれからの試合に臨めば、怖いものはない。底力を出そう！」と選手たちを激励した。

二回戦以降、終わってみれば前半で勝負を決める大差の勝利であった。このような予想だにしなかった戦いができた要因を考えると、一回戦の山場を越えた開き直りと三回戦での金沢大学戦で得たものであろう。金沢大学は、7名の出場者のうち2名の二刀（二本の竹刀を構える）、2名の上段の構えの選手を起用し、しかも積極的に勝負を仕掛けてくる戦法をとっていた。日ごろやりなれていない変則的なタイプで、しかも勝負に対する集中力と粘りが特徴的で厄介な相手だった。そのとき選手に指示したのは「相手は『はじめ』の合図で直ちに仕掛けてくる。そこで受身に回ったらペースをつかまれる。機先を制して相手より先に仕掛けろ。」であった。この取り組みが功を奏して圧勝であったばかりか、選手が勝機を得る戦い方をつかんだようであった。相手と対したときの構えが充実していれば、相手がよく見えて、相手の瞬時の隙に対応できる、というレベルに達したようであった。以降、準々決勝戦で今年の関東チャンピオン、しかもこれまで頂点への挑戦をことごとく阻んできた強豪中央大学に圧勝して優勝をほぼ手中に収めた。「大体大、大爆発」「大体大前へ、前への一本」「学生剣道の勢力地図が塗り変わる予兆」「自力の差か」本学に対するメディアの評価である。

## 師弟同行

この大会を通して、選手たちが自分をわかり、相手をわかり、一生懸命にできたことが大きい。試合を通してまた一つ成長したというであろう。何度も全国制覇のチャンスがありながら、それを逃してきた監督としての責任を感じていた。その度に私が思ってきたのは、その日がくるまで学生と喧嘩しながらでも付き合っていこうということであった。学生はいつ強くなるか分からない。大会に備えての準備段階でそれが完成されることに越したことはないが、今回の優勝のようにその当日に「思わぬ」成長を遂げることができた。

学生には「我々指導者のからだを通して強くなれ」を常々と言っている。私も学生と稽古をして少しずつではあるが成長させてもらい、両者の良き関係を確立している。この指導スタイルが剣道の持つ武道、芸道としての特殊性であろう。大会会場であっても私は他の監督が背広であぐらをかいて座っているのに対し、剣道着に必ず着替えて正座するようにしている。座りやすいということもあるが、試合場もまた選手の「稽古・修行の場」であると考えからである。試合が始まって選手にあれこれ指示を出すことはしない。一試合40分、決勝までの6試合を立て続けに座り続けることが私の仕事である。役に立たずただ座るだけであるが、「いい座りだった」と言われることが嬉しい。

本学の剣道部は、寒稽古に象徴されるようにOB・OGはもとより部外者に関き、支えられ、お互いに高め合おうとする取り組みが特徴で、それが誇りである。この精神を今後も継承しながら剣道界に一灯をともしよう活動をも更なる成績を求めていきたい。

# 審判法実習概要

今回の審判法実習では、学生を5グループに分けて、各グループに神崎浩先生・榊康守先生・木原資裕先生・上野和雄先生・香川直己先生が加わり、グループごとに指導をしていただきました。学生が模範試合・審判をし、実践を交えた実習を行いました。

## (審判の心得)

- ・有効打突を見逃さない。
- ・自分の意思表示をはっきりと。
- ・大きな声で。
- ・瞬時に的確に判断する。
- ・有効打突と思った場合、はっきりと挙げる。入ってないと思ったら、入っていないという意思表示を明確にする。

- ・合議をして確認をした場合は、主審のみが旗を挙げる。

## (その他)

- ・合議をかけない限り、判定はくつがえらない。
- ・審判の技術が高まると、選手としての技術も高まる。
- ・竹刀がまわっているのを注意する場合は、刃を持たず柄や鍔野あたりをもって指導する。

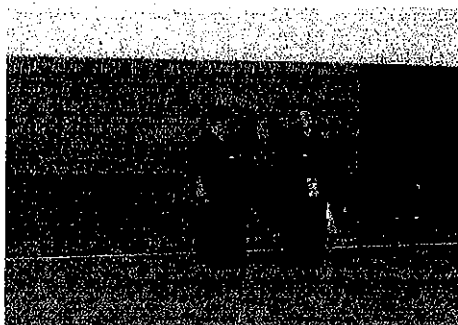
## (審判の入退場)

- ・コートに入るときは、コートの外側を回り、審判員の礼の位置にきたら正面に向きを変え、主審が指揮をとって3人そろってコートに入る。礼が終わった後、副審はお互いにそろって開始線の内側に向かって直線上に進み、開始線を横切って位置についたら内側に振り向く。
- ・退場するときには、位置についたときと同じ直線上を進み、礼の位置に戻る。礼の後、コートの外に出ず主審の指示でそのまま向きを変えて3人そろって退場する。
- ・退場した後、審判同士であいさつをし、お互いに反省をする。



## (審判の動き)

- ・巻いてある審判旗は、片手で回してとかず、両手でとく。また、巻くときも同じである。
- ・審判旗の持ち方は人差し指を伸ばした方向に審判旗を持ち、肘をしっかり伸ばす。
- ・審判員の姿勢は、腹に力を入れて姿勢を正しく立つ。
- ・3人の審判員が、はっきり見える位置に移動する。
- ・副審は、主審を中心として、二等辺三角形を作るように動く。
- ・審判員は、選手の動きを予想して素早く動く。
- ・審判員がローテーションをする場合は、礼をして審判旗を巻いて右手に持ちなおし、開始線の内側を通過して移動する。



# 神崎浩先生実技指導

## はじめに

「剣道は意味のある相互作用」、これを目標とします。意味のある相互作用とは、動作とは相互に意味のあるものではなくてはならない、ということです。これを皆さんが聞きなれた言葉に直すと、「気剣体の一致」ということになり、これはうちを一本にするのには必要不可欠なものです。

剣道には様々な稽古がありますが、その稽古においても気剣体は一致しなければなりません。素振りの段階からこれを心がけてください。

気剣体の一致には攻めが必要になります。打つ前(技前)に攻めを行います。流れで表すと、

技前→→→気剣体の一致

間合い



一足一刀の間合い(人によって、  
状況によって異なる)

となります。そして、一足一刀の間合い、攻め、気剣体の一致、これを兼ね備えるには、一拍子(一つの動作で打つ)が必要で、これも素振りの段階から心がけて行うことができます。「技」というものは、この後のものなのです。

## (切り返し)

発声をするのは立会いの間合いのときです。一足一刀の間合いで発声をしては、相手に打たれてしまいます。その後、一足一刀の間合いに入り、打突を行います。

切り返しの際、左右面は相手に受けられてしまいますが、受けられなかったら左右面を打てるようにしっかり狙って下さい。受ける方も、できるだけ面に近い位置で受けてあげて下さい。また、9本目から次の正面打ちまでの間に、息は継がないようにして下さい。

## (正面打ち)

気剣体の一致がし易いように、遠間から、右足、左足、右足と出して正面打ちをして下さい。これは2本連続でして下さい。

打つ過程で顎が上がらないように、また足を跳ね上げないように注意して下さい。正面打ちをした後、相手を避けずに真っ直ぐ進んで下さい。元立ちは打たれた後、一度後ろに下がってから、避けて下さい。元立ちは相手に真っ直ぐ打たせることを、心がけて下さい。

打ちの際は相手にばれない打ちを心がけて下さい。そのためには、一足一刀の間合いから足を継がずに、構えたところから打つまでを一足で行うようにして下さい。

振りかぶりは小さくてもかまいませんが、しっかり打ち切ることを心がけて下さい。

## (小手打ち 1)

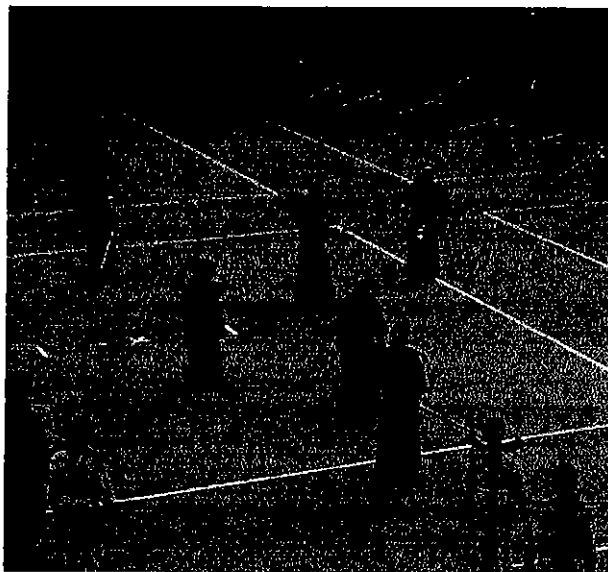
今日は打った後、相手に体当たりして下さい。これは、真っ直ぐの打ちを意識するためです。面打ちと同じく、足継ぎをしないように気を付けて下さい。小手は面と比べて近い位置にあるので、若干、間合いは速めのして下さい。

一足一刀の間合いから、余計な動作なし、足継ぎなしで打つのが基本です。一足一刀の間合いに入るまでに様々な方法があります。その際に構えが崩れないようにして下さい。

小手を打つ際に体が前に傾かないようにして下さい。遠すぎる間合いでは無理が出てしまうので注意して下さい。

## ・小手打ち

次は遠い間合いから、一步入って小手を打って下さい。その際、間合いに入ってすぐに打つのではなく、少しためてから打って下さい。一步入る、というのは一番オーソドックスな攻めです。攻めというのは相手に変化を与えるものです。



### (払い小手)

中心を取ってれば打たれません。中心を取っている相手を崩すための技です。一足一刀の間合いから少し遠い間合いから払う、という攻めを入れて、小手を打ちます。これも一足で行います。

払い小手のポイントは、打つ途中で払う感じで行うとうまくいきます。払うときには足が出ているように気を付けて下さい。

相手を崩すというのは、その状況に応じた崩しをするように心がけて下さい。元立ちは相手が崩しやすいように、剣先を少し高く、さらに手首をやわらかく、剣先を少し右にしてあげて下さい。そうすると崩しやすく、払いと小手を打つ間隔が短くなります。

また、先程も言いましたが、払うとき竹刀と一緒に足が出るようにして下さい。

自分の体の使い方としては、

- ・一足一刀
- ・継ぎ足をしない
- ・攻める
- ・相手の構えを崩す

ということをご心がけて下さい。

### (面、抜かれた後、面)

これは面を打つが相手によけられた後、もう一度面を打つというものです。あくまで最初の面を決めるつもりで打って下さい。つまり、面を抜かれたら剣先は相手の面金よりも下にくるはずですが、

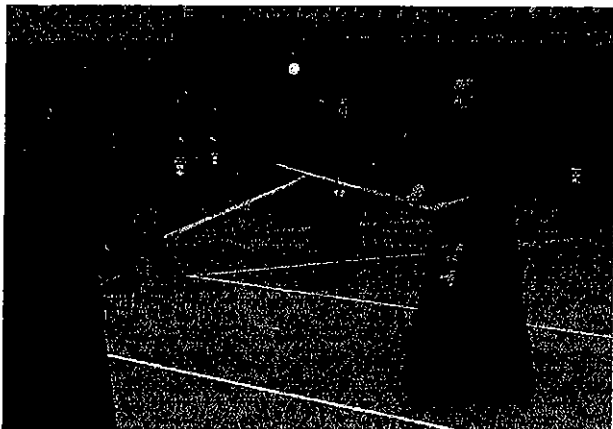
一つのうちを大事にするのが基本ですが、相手によけられることもあります。その時、体制が崩れていなければ次の技を繰り出すことができます。

### (小手、抜かれた後、面)

これも同様に小手を決める気で打って下さい。

### (小手、抜かれた後、追いかけて面)

次は小手を抜かれた後、下がる相手を追いかけて面を打ちます。面の送り足は小さく早くを心がけて下さい。

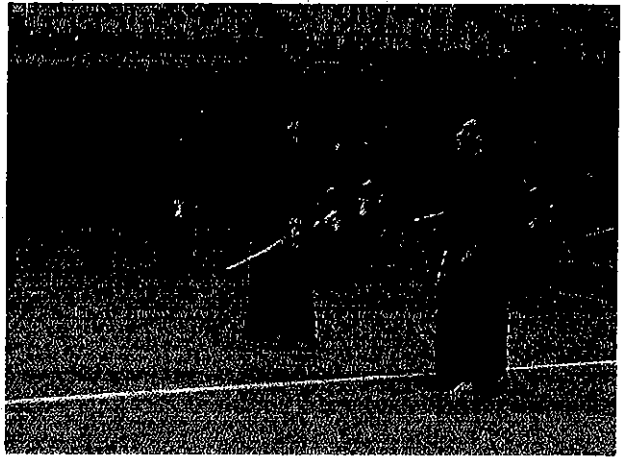


### (出頭の面)

次は相手が自分の打ち間に入ったところを面を打ちます。元立ちは相手がうまく打てるように配慮してあげて下さい。具体的には、わかりやすく大きな動作で相手の打ち間に入って下さい。

### (相面)

次は相手が面を打つのに対しての面です。



### (相手が間合いに入り、面)

#### それに対して 応じ技)

遠い間合いから相手が近間に入ってきます。その後、面を打ってくるのでそれに対して好きな応じ技をして下さい。

応じ技は相手が打ってくるのを待つのではなく、攻めて打つことを心がけて下さい。

間合いはきちんと、丁寧に取って下さい。

### (相手が間合いに入り、小手)

#### それに対して 応じ技)

面と同じように相手を誘って応じ技を繰り出して下さい。

### (打ち込み)

気剣体の一致を心がけて下さい。打った後、間合いが遠ければ間合いを詰めて、近ければすぐに打って下さい。

打ちは正しく、大きな動作で打つようにして下さい。元立ちは相手にわかりやすく打つ部位を示すようにして下さい。

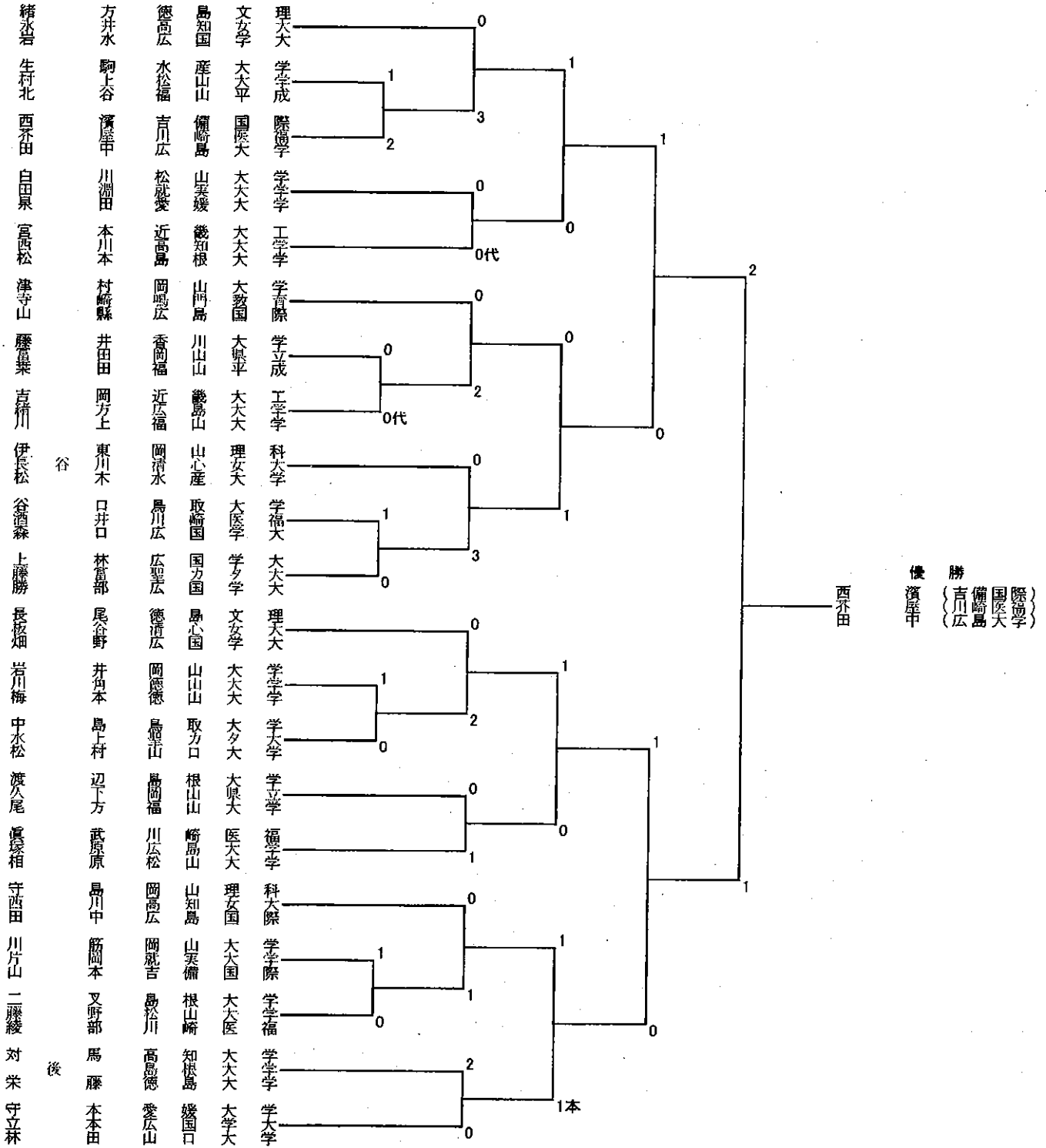
### (最後に)

一足一刀、足継ぎなし、攻め、の三つが重要です。普段の稽古ではできますが試合になるとできなくなってしまいます。素振りから試合まで、この三つができることが理想です。

# リーダー選手権

最終日の午前中にリーゼミ選手権が行われました。ランダムに抽選された女子1名・男子2名の混成チームによるトーナメント形式の大会です。審判も学生同士で、試合する側でも審判する側でも今回のセミナーの成果が発揮されました。

## 第7回中四国学生剣道リーゼミ選手権大会



## 表彰式

接戦が繰り広げられたリーゼミ選手権大会も幕を閉じました。チームメートの仲も深まったことでしょう。優勝チーム、準優勝チーム、3位チームに賞状と賞品、また、敢闘賞に8人の選手に賞品が手渡されました。敢闘賞は、リーゼミの総合的な面での先生方の判断です。

※大会の結果は、次の通りです。

### 優勝

芥屋友里(川崎医福) 西濱亮平(吉備国際) 田中一徳(広島大学)

### 準優勝

川角佳子(徳山大学) 岩井宣瑛(岡山大学) 梅本哲平(徳山大学)

### 3位

酒井教子(川崎医福) 谷口祐己(鳥取大学) 森口 光(広国学大)  
後 恵美(島根大学) 對馬雅人(高知大学) 榮藤大輔(徳島大学)

### 敢闘賞

川上益宏(福山大学) 畑野佑介(広国学大) 眞武光志郎(川崎医福)  
北谷武志(福山平成) 山本真敬(吉備国際) 片岡香菜代(愛媛大学)  
寺崎千穂(鳴門教育) 冨田知可(岡山県立)

優勝されたチームのみなさんおめでとうございます。



# 平成15年度リーダーゼミナールを終えて

中四国学生剣道連盟副幹事長 長崎誠

去る、平成16年3月9日(火)～11日(木)に、宮本武蔵顕彰武蔵武道館において、「平成15年度中四国学生剣道リーダーゼミナール」を大阪体育大学助教授の神崎浩先生、中四国学生剣道連盟の先生、先輩方のご指導のもと、中四国大学の剣道部のリーダー及び連盟役員78名の参加で開催いたしました。

一日目、先生方のご挨拶と連盟役員の紹介、また、各大学ごとの紹介を終え、平成15年度リーダーゼミナールが開催されました。一日目は、神崎先生による、実技指導と講話が行われました。「日頃稽古をしている基本稽古でも、考え方を変えるだけで全然違っていた。」「自分たちの稽古を見直すことができた。」「リーダーとしての考えが深まった。」といった感想が、参加者から多く出ていました。

また、二日目は、初日に引き続き神崎先生の実技指導と榊先生、木原先生による審判法が行われた。ここでは、「審判をする機会がなかなかないため、いい経験になった」「剣道に対する視野が広がった」等の感想が見られました。

運営していく中で、また感想を読んでいくうちに、三日間という短い期間の中で、参加者は先生方の指導から色々なことを盗み取ろうとしていたことを感じ、このリーダーゼミナールでは、実技だけでなく、リーダーとしての役割やリーダーに必要とされていることを学び取れたと確信しております。また、参加者にとって、試合や交流会など他大学と交流ができたということもいい経験になったという声が多くありました。中四国の剣道をレベルの高いものにしていくためにも、まとまりをもって互いに高め合うことが必要になってくると考えます。今後、さらにリーダーゼミナールがよいものになるように検討し、中四国の学生剣道を盛り上げていけたらと思います。

最後になりましたが、このリーダーゼミナールを行うにあたり、御指導、御尽力下さいました諸先生方、先輩方、主管大学、学生役員並びに参加されました学生の皆様のご協力に対し、心より感謝の意思を表し、感謝とさせていただきます。

